

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

# 政府間協議体から立憲的組織体への創造的展開 往復書簡からたどるハマーショルドの思索

著者	船尾 章子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	69
号	2
ページ	47-63
発行年	2018-11-19
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00002250/">http://id.nii.ac.jp/1085/00002250/</a>

# 政府間協議体から立憲的組織体への創造的展開

## 一往復書簡からたどるハマーショルドの思索一

船尾 章子

### 1. はじめに

1961 年 9 月 18 日に飛行機事故のためアフリカで不帰の客となったダグ・ハマーショルド (Dag Hammarskjöld) を偲び、1960 年にノーベル文学賞を受けた詩人、サン＝ジョン・ペルス (Saint-John Perse) は、スウェーデン国王グスタフ 6 世宛に哀悼の書簡を送った。次の一節が故人と詩人との関係を語る。

ダグ・ハマーショルドは、その人柄を知り、友情を分かち合った者にとって、比類なき騎士として存在し続けます。彼は、まさに高貴さであり、勇気であり、誉れであって、われらすべての重大関心事への務めにあたっては、自己規律と犠牲精神に徹しておりました。その並はずれた献身において、ついには殉教者となったのです。彼の理想主義と信念が生き続け、人を動かし続けますように！

この書簡の末尾には、詩人の筆名でなく、その本名が記された。アレクシス・サン＝レジェ・レジェ (Alexis Saint-Léger Léger) と。

レジェは 1940 年までフランスの外務官僚であった。若き日の北京大使館勤務を除いて、セーヌ河岸の本省で終始、仏外交政策の立案と実施の中枢にいた。1925-1932 年には、外務大臣のブリアン (Aristide Briand) による持続的・広域的平和秩序を視野に収めた幅広い多国間外交の実践を官房長として支え、1933 年からは、外務省事務総長の要職に就いて省務を統括した。1925 年以来詩作は中断されたが、1940 年にこの職務を突如解任され、亡命の地、米国で創作を再開する。外交の世界には、結局、戻ることはなかった。

ハマーショルドは、まず彼の詩に出会い、その愛読者として、ノーベル文学賞の選考過程において、その推奨に努めた。

外交官時代のレジェは、ブリアン外相に随行して国際連盟のあらゆる重要会

1 “Lettre au Roi de Suède, 20 septembre 1961”, dans Saint-John Perse, *Oeuvres complètes* (Gallimard, 1972), pp. 637-638.

合に出席したのはもちろん、国際連盟の集団的安全保障制度を補完するロカルノ合意の形成やヨーロッパ地域の連合組織構想の提案、さらにはブリアン・ケログ条約起草の過程にも深く関与した、多国間外交の先駆者であった<sup>2</sup>。

ブリアンとレジェによる戦間期の多国間外交の実践的経験の蓄積とその教訓、さらにはそれらを貫く基本理念や手法は、冷戦期の国連事務総長としてのハマーショルドの職務遂行において、あるいはそれを導く国際平和機構観やその基本理念および手法において、何らかの意味を有したのであろうか。超大国の力の対決と反植民地主義の高揚という時代のうねりの中で国連の進むべき新たな航路を探索したハマーショルド事務総長の行状は既によく知られている。本稿では、その行動の基幹にある基本理念や長期的な視点からの国際平和機構観に焦点を合わせ、国際連盟期の多国間外交の実践者たるレジェとハマーショルドとの間に交わされた往復書簡を主な手がかりとして、彼の思索の軌跡を探ってみたい。

本稿は、外交当事者の認識や理念的志向性に注目し、あくまで当事者の視点から国際平和機構の機能のあり方を捉えることをめざす。国際平和機構研究の主流は、制度や特定の時期の組織体としての具体的活動に関する客観的論究であって、認識や指導理念に重点を置く先行研究は、管見の限り、ごく限られている。国際機構研究において、組織体に関する認識や理念のあり方に注意を向けた草分け的存在はクロード<sup>3</sup>であろう。ハマーショルドの行動理念や哲学については、同時代のシャクター<sup>4</sup>やラッシュ<sup>5</sup>の分析があるが、いずれも、講演やインタビュー等に表れた、公式見解に依拠するものである。本稿は、こうした資料と親密な友人に内面を語る書簡とを組み合わせることにより、先行研究とは別の角度からハマーショルドの行動の底流をなす思索に光を当てる試みである。

そのために、レジェがハマーショルドとの全人格的な交友においていかなる存在だったのかをまず通覧した上で、ハマーショルドの思索を尋ねることにする。

2 レジェの外交上の業績については、see E. Cameron, “Alexis Saint-Léger Léger : Fighter for Lost Cause”, R. Challener, “The French Foreign Office : the Era of Philippe Berthelot”, both in G. A. Craig and F. Gilbert, eds., *The Diplomats 1919-1939* (Princeton UP, 1993). また、ブリアンの多国間外交における役割については、拙稿「戦間期における多国間主義にもとづく平和と安全の探求」『外大論叢』第68巻第2号を参照。

3 I. Claude, *Swords into Plowshares* (Random House, 1971).

4 O. Schachter, “Dag Hammarskjöld and the Relation of Law to Politics”, *AJIL*. Vol. 51-1 (1962).

5 J. Lash, “Dag Hammarskjöld’s Conception of his Office”, *International Organization*, vol. 16-3 (1962).

## 2. ハマーショルドとレジエの親交

### 2.1. ハマーショルドと詩人サン＝ジョン・ペルスの接点

#### 2.1.1. 合衆国の亡命詩人

レジエがフランスを去ったのは、1940年5月19日に外務省事務総長を解任するとの通告を受けてから約1ヵ月後であった。ヴィシー政権は同年10月には反祖国罪で彼の国籍を剥奪し、財産を没収した。パリの住居にはゲシュタボが踏み込み、一切の書類を押収したという。その後、レジエは英国からカナダを経て1941年2月にワシントンへ到達し、米議会図書館に身を寄せた。同館館長で詩人のマクリーシュ（Archibald MacLeish）の計らいにより、文芸参与の席を得たのである。<sup>6</sup>

文学の世界では、フランスの代表的文芸雑誌、NRF（Nouvelle Revue Française）に掲載された「賛歌（Eloges）」、「遠征（Anabase）」などの作品により、レジエの詩人としての評価は、1920年代までに確立していた。詩作に用いたサン＝ジョン・ペルスという判じ物めいた筆名から、対社会的に、外交官レジエと詩人とを、あたかも別人格であるかのように切り離そうとする意思が認められるが、1925年にブリアン外相の官房長に就任すると、彼は文学活動自体から手を退いた。フランス国内では1947年まで、既刊の著作の再版さえ認めなかったのだが、『遠征』（1924年刊行）の翻訳だけは許可しており、エリオット（T. S. Eliot）による英訳（1930年）の他、ロシア語訳（1926年）、ドイツ語訳（1929年）、イタリア語訳（1931年）、ルーマニア語訳（1932年）が外国で出版された。

『遠征』英語版により、サン＝ジョン・ペルスの詩名は亡命の地でも既に認知されていた。1941年から詩人は、「流謫」「雨」「雪」等々の作品を、合衆国やアルゼンチンの文芸雑誌に発表し、文学の世界に復帰した。<sup>8</sup>

平和回復後、彼の新作や過去の作品集はフランスでも上梓され、サン＝ジョン・ペルスの名は、大戦前よりもはるかに知られるようになった。その名がノーベル文学賞選考の場に登場するのは1952年からである。その嚆矢は、NRF誌の編集長で文芸評論家のポーラン（Jean Paulhan）による推挙であった。<sup>10</sup>

6 “Biographie”, dans Saint-John Perse, *op. cit.*, pp.XXII-XXVII, Cameron, *op. cit.*, p. 403.

7 R. Meltz, *Alexis Léger dit Saint-John Perse* (Flammarion, 2008), p. 760.

8 “Biographie”, dans Saint-John Perse, *op. cit.*, pp. XIX-XXI.

9 Meltz, *op. cit.*, p. 748.

10 “Présentation” par l’éditrice, dans Saint-John Perse, H. Hoppenot, *Correspondance 1915-1975* (Gallimard, 2009), p. 120.

### 2.1.2. ニューヨークの動き

同じ頃国連は、事務総長の交代劇で揺らいでいた。1952年9月、朝鮮戦争を背景に、初代事務総長のリー（Trygve Lie）が、政治的行政的に四面楚歌の状態となって辞意を表明した。その後任候補の選定をめぐる、安全保障理事会の審議が膠着状況に陥る。その隘路を打開しようと、候補者選定方式の代替策を提案したのが、フランスの国連代表部常駐代表、オプノ（Henri Hoppenot、1952年1月-1955年9月在任）である。オプノは、かつてレジェの近しい同僚で、ブリアン流外交政策の実施を共に担ったばかりでなく、文学的嗜好も共有していた<sup>11</sup>。オプノの提案とは、米国が許容すると考えられる候補者4名を提示し、そのうちソ連も許容しうる人物を後任候補者とする、というものであった。ここにハマーショルドの名が加えられたことが、第2代事務総長選出への端緒を開くことになる。

ハマーショルドは当時、スウェーデン政府の無任所国務大臣で、国連総会の同国代表団の首席を務めていた。それまでに経済通の高級官僚として、マーシャルプラン受け入れのための調整機構たる欧州経済協力機構（OECE）の多国間交渉において優れた外交手腕が認められていたとはいえ、国連ではさほど知られた存在ではなかった。ハマーショルド自身が、次期事務総長に選出されたとの報に接した際に、まず驚きをあらわにしたと伝えられるほどである<sup>12</sup>。

1953年4月に事務総長に就任したハマーショルドとオプノとは、職務上の接触を越えて個人的交流を深めて行った。それは、文学および造形芸術に関する嗜好が一致していたからであった<sup>13</sup>。レジェとハマーショルドの共通の友人たるオプノが、両者の出会いを媒介することになる。

### 2.1.3. ノーベル文学賞へ向けて

オプノの回顧によれば、事務総長就任から数ヵ月経った頃、ハマーショルドはサン＝ジョン・ペルスの作品を初めて知り、深く感動したと彼に語ったという。それが、『遠征』を読んだ感想だと知って、オプノはその前後の作品を含む全詩集を貸した。ハマーショルドは、詩人への関心を一層深め、レジェその人についてもあれこれ聞くようになったという。

ハマーショルドは1954年にノーベル文学賞の選考にあたるスウェーデン学士院の会員に選ばれた。オプノはこの詩人が同賞に値すると説き、候補者とし

11 オプノは、ブリアン路線を支えた外務省内のグループにおいて、レジェやクロードと親しい関係を築いていた。“Introduction”, dans *ibid.*, pp. 12-19.

12 選任までの経緯につき see B. Urquhart, *Hammar skjold* (Norton, 1994), pp. 11-15.

13 H. Hoppenot, “La mort du Secrétaire Général des Nations unies Dag Hammar skjold”, *Le monde diplomatique* no. 90, (1961).

て学士院に推薦することを提案した。<sup>14</sup>

この話をオプノから電話で聞いたレジェは、1955年2月、大きな本の包みを彼に送り届けた。これを知らせる手紙にはこう綴っている。ノーベル賞を受賞できるとすれば、それはどれほど多大な意味を持つことか。滞米資金は年内には尽きるし、外務省の年金は故国の姉を扶養するのさえ不十分だし。けれども、文学界から隔たっていると、それは想定し難いと感じられる。北方の諸氏(ces Messieurs du Nord)に推薦してくれる研究者もいなければ、(友人だった)ジードも亡くなった。ただ、君が友情溢れる熱心な配慮を示してくれるだけで僕には十分過ぎるというしかない。関係方面の参考に供するため、仏英2言語による全作品集を別送するので、部数が足りなければ知らされたし、と。<sup>15</sup>

オプノ夫人エレヌの日記には、レジェが、動かないのが賢明なのか、それともパリでも働きかけをしてもらう方がよいかを知りたがり、何もかも変っただろうね、と繰り返したとの記述があるという。<sup>16</sup>

ハマーショルドは1955年2月、書面で詩人を学士院に推賞し、以来、同僚会員のためにその作品について報告書を作成した。<sup>17</sup>

ハマーショルドとレジェが直接顔を合わせたのは、1955年の晩秋である。そのとば口を開いたのは、同年7月にハマーショルドがレジェに宛てた私信であった。この私信の内容は、自分がいかに貴下の作品を愛読しているかをお目にかかってお伝えできずにいるのが残念だが、同胞で詩人のリンデグレン(Erik Lindegren)に勧めたスウェーデン語訳の作業が現在進行していることをお伝えし、翻訳者への助言を請うとする。さらに、自分もいつかお会いできることを願っている、と書き添えられた。<sup>18</sup>

この翻訳の狙いとして、スウェーデンではまだ知名度の低かったサン＝ジョン・ペルスの作品の受容を促し、作品への認知を広げることがあったと考えられる。その後の翻訳に関する問い合わせに対してレジェから好意的回答を得たこともあり、ハマーショルドは同年11月に彼を食事に招いた。<sup>19</sup>

ハマーショルドとの出会いについて、レジェはオプノにこう書き送った。1955年の終盤にニューヨークで、君の友人から自宅での公式な外交的晩餐に招かれ、次いで国連ビル最上階のもっと親密な午餐に参じる(ただし、ひとり

14 Ibid.

15 Lettre d'A. Léger à Henri Hoppenot, 15 fev. 55, dans Saint-John Perse, Hoppenot, *op. cit.*, pp. 125-127. Voir aussi "Présentation" par l'éditrice, dans *ibid.*, p. 121.

16 Meltz, *op. cit.*, pp. 748-749.

17 M.-N. Little ed., *The Poet and the Diplomat* (Syracuse UP, 2001), p. 19.

18 Lettre de D. Hammar skjold à A. Léger, le 7 septembre, 1955, dans A. Léger, D. Hammar skjold, *Correspondance 1955-1961* (Gallimard, 1993), pp. 87-88.

19 Lettre de D. Hammar skjold à A. Léger, le 10 novembre 1955, dans *ibid.*, pp. 91-92.



ではなかったがね) など、知遇を得たよ。彼は、素晴らしく感じがよくて、聡明で嗜み深く、繊細にして自由、そして勇敢で、驚くべき公正さを備えている。文学について、スウェーデンの最新動向から詩の解釈や言語の問題、さらには現在進行中の拙作の翻訳まで、彼の話は尽きなかった、と。この手紙は、ノーベル文学賞には婉曲にしか触れず、ハマーショルドは本質に通暁しているようで、自分は一切語らなかつた、と述べるにとどまる。<sup>20</sup>

1955 年のノーベル文学賞受賞者選考過程において、サン＝ジョン・ペルスは最終候補者 5 人の中に残ることができた。ハマーショルドは翌年の選考に備えて、ノーベル文学賞受賞者による候補者推薦の権利をフランス人受賞者に活用してもらえると心強いとオプノに示唆し、推薦の期限は 1 月末まで、提出先は学士院院長だと伝えた。そこでオプノは、モーリヤック (François Mauriac、1937 年受賞) とマルタン・デュ・ガール (Roger Martin du Gard、1952 年受賞) に書面で協力を依頼している。<sup>21</sup>

スウェーデン学士院に対してサン＝ジョン・ペルスを文学賞候補に推薦したのは、エリオット (1955 年)、マルタン・デュ・ガール (1956 年)、マクリーシュと米国文化芸術アカデミー (1958 年) 等であった。<sup>22</sup>

1956 年前半にレジェとハマーショルドとは親密さを加えた。6 月にハマーショルドは自邸にレジェを招き、午前 2 時まで政治や文学や彼自身について、胸襟を開いて熱く語っている。その様子をレジェはオプノ夫妻に書き送り、彼のドンキホーテ流ときたら、なんとも愛すべきだよ、と記している。<sup>23</sup> 国連事務局では、内気で物静かな紳士という印象が強かったハマーショルドだが、<sup>24</sup>レジェには内奥の熱情と一途さを隠さなかつたのであった。

1959 年 10 月、レジェは新刊の『年代記 (Chronique)』をフランスからハマーショルドに送り、こう書き添えた。君はいつか僕に、大地への詩を書くべきだといったことがあったが、これがそうだよ。『年代記』の表題の下、語源的には、大地と人間と時代へ捧げる詩なのだが、僕にとってはどれも、永遠という時間を越えるひとつの概念へと融合するのだよ。ニューヨーク経由で戻る

20 Lettre d'A. Léger à Henri Hoppenot, 12 fev. 56, dans Saint-John Perse, Hoppenot, *op. cit.*, pp. 134-137.

21 Lettre d' H. Hoppenot à G. Gallimard, Decembre 1955, et lettre d' H. Hoppenot à F. Mauriac, Janvier 1956, dans *ibid.*, pp. 186-188. 未知のマルタン・デュ・ガールについては、ガリマール社社主に仲介を依頼した。

22 Nobel Foundation, "Saint-John Perse - Nominations", available at [http://www.nobelprize.org/nobel\\_prizes/literature/laureates/1960/perse-nomination.html](http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/1960/perse-nomination.html).

23 Lettre d'A. Léger à Hélène Hoppenot, 8 juillet 1956 dans Saint-John Perse, Hoppenot, *op. cit.*, pp. 138-142.

24 Urquhart, *op. cit.*, p. 27.

折には、君に会って近時の外交行動やその波及について聞きたいものだ<sup>25</sup>。

ハマーショルドは1960年初夏から、自らこの『年代記』のスウェーデン語訳に手を染めた。8月にはその試訳が、スウェーデン学士院会員に配布されている。これは、コンゴ国連軍（ONUC）が設置され、現地に展開する<sup>26</sup>という疾風怒濤の時期に丁度重なる。

10月26日、同年のノーベル文学賞受賞者はサン＝ジョン・ペルスと決定された<sup>27</sup>。5年に及ぶハマーショルドの支援運動も関心を呼び、『フィガロ文芸』紙11月5日号の受賞特集には、ハマーショルドの談話が掲載された。それによれば、事務総長は、国連総会の議場を一時退出して取材記者にこう語った。『年代記』の翻訳は、愛着と同時に義務でもある。この手法は、学士院の同僚たちに資するとともに、私を魅了した詩に改めて立ち返ることにもなったからである。私は外交官でしかない。そう、詩人ではないが、詩や文学に対する関心は、「ホビー」と呼ばれるような気晴らしでは決してない。それは、特に外交官にとってなくてはならない補完物なのだから。外交と文学にはいわば親密な関係があって、不思議で謎めいて聞こえるとしても、これには理に合う根拠があるのだ。外交官は詩人同様、言葉を使って仕事をし、言葉を置き換え、言葉を鍵とする。アレクシス・レジェに限らず、クロードルもジロドゥの場合もそうである。物事を別の言語に置き換え、表明するのが外交の日常なのだから。読み、翻訳する、この重大事項に私は毎日時間を使っているし、今後もそうするだろう、と<sup>28</sup>。

レジェは、11月15日付けのハマーショルド宛の手紙に記した。君が外交における詩的な、あるいは創造的な思考について語ったインタビュー記事、どれほど僕の気に入ったことだろうか。ブリアンも君の考えを気に入るはずだよ。そこには本質的真実があるから、と<sup>29</sup>。ふたりの往復書簡の中でブリアンが直接言及されるのはここだけである。とはいえ、この書き方は、彼らの会話においてブリアンが話題になっていたことを窺わせる。レジェはハマーショルドに贈る著作の献辞に、「出会いからの期間以上に古き友情に」<sup>30</sup>と書いたこともあった。そこに旧知の人物を重ねあわせているとするならば、それはブリアンと考えるのが最も自然ではなかろうか。

25 Lettre d'A. Léger à D. Hammarskjold, 24 octobre 59, dans Léger, Hammarskjold, *op. cit.*, p. 164.

26 Urquhart, *op. cit.*, p. 36.

27 *Ibid.*, p. 39.

28 L. Sauvage, "M. Hammarskjold quitte la séance de l'ONU et nous parle des bienfaits de la Poésie en diplomatie", *Le figaro littéraire* no. 759 (1960).

29 Lettre d'A. Léger à D. Hammarskjold, 15 Nov 60, dans Léger, Hammarskjold, *op. cit.*, pp. 187-190.

30 *Ibid.*, p. 133, note 1.



12月10日のノーベル文学賞受賞式典において、スウェーデン学士院からの歓迎演説が、授賞に値する特質として、サン＝ジョン・ペルスがその政治的経歴を通じて培われた視野の広さと精神的品格を基礎に、不断の創造者たる人間を、あらゆる多様性と時間の広がりにおいて描かんと欲し、一見すると難解な言語と往々にして把握し難い象徴の陰に、同時代人に対する普遍的メッセージを届けていること、かつ、独自の表現を通じてフランス詩芸術の伝統に寄与したことを、指摘した。<sup>31</sup>

サン＝ジョン・ペルスは受賞講演において、およそ次のような点を語った。自分が受けた栄誉は、詩なるもの (*la poésie*) に帰すべき栄誉である。原始の時代から詩人は存在するが、神話というものが廃れるとき、神的なものの逃れ場となり、新たな乗りものとなるのが、詩なるものである。その一握により、詩なるものは、過去も未来も現在へと包摂し、人類と超人类的なもの、地球空間と宇宙空間とを包括する。その難解さを人が咎めるとしても、それは詩なるものの本性ではなく、それが探求し、かつ探求すべき夜、つまり魂の夜と人間を包む神秘の夜の闇ゆえである。詩人がなすべきこと、それは人間精神に対してその霊的可能性をつぶさに映す鏡を掲げることである、と。<sup>32</sup>

ハマーショルドは式典への出席を切望しながら、この日にニューヨークを離れることはできなかった。彼は、コンゴ問題をめぐって紛糾する総会の会期中に、この受賞講演をスウェーデン語に翻訳した。<sup>33</sup>

ハマーショルドの文学面の活動には3つの態様があった。第1は、スウェーデン学士院への積極的関与、第2は、文学作品の翻訳、第3は、文学に関連する問題の解決への手助け、である。ハマーショルドが作品を翻訳した作家や支援・救援に尽力した作家は、サン＝ジョン・ペルスだけではない。<sup>34</sup> ハマーショルドにとってこの詩人が特別な存在だったのは、単に文学面にとどまらず、事務総長の職務にかかわる国際政治や多国間外交の面でも、理念と問題認識とを共有することができたからである。レジェは公人ではなかったから、ごく微妙な政治状況についてでも率直に語り合えるという意味からも、稀有な存在だったといえよう。次に、個別具体的な国際政治・外交問題をめぐって、両人の間にいかなるやりとりが交わされたのかを、瞥見しておきたい。

31 Presentation Speech by Anders Österling, Permanent Secretary of the Swedish Academy, available at [http://www.nobelprize.org/nobel\\_prizes/literature/laureates/1960/perse-nomination.html](http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/1960/perse-nomination.html).

32 “Poésie, allocution au Banquet Nobel du 10 décembre 1960”, dans Saint-John Perse, *op. cit.*, pp. 443-447.

33 Urquhart, *op. cit.*, p. 39.

34 *Ibid.*, pp. 37-42. 例えば、スタインベック (John Steinbeck) のノーベル文学賞受賞への支援、ブーバー (Martin Buber) の著作の翻訳、パウンド (Ezra Pound) の苦境への手助け等。

## 2.2. 国連事務総長と元外務省事務総長との意見交換

ハマーショルドがレジェと直接ことばを交わしてから半年後の1956年4月、パレスチナ情勢が緊迫化する中で、国連安全保障理事会は事務総長に対して、休戦協定の実施および遵守状況を調査し、緊張緩和のためにとるべき措置を手配するよう求めた。彼は4週間で5カ国を巡る「外交マラソン」へと赴いた。<sup>35</sup> その出発の直前レジェに宛てた書簡にはこう記されている。目下の状況と私を待ち構えている交渉のように、目標があり、道はあっても、2歩先すら見えない場合に導きとなるのは、エヴェレストのピッケルとコロンブスの帆船のみ<sup>36</sup> だけれど、旅から戻ったらまたお話を伺いたい、私には、詩人の叡智と生命力と視点とを注入していただく必要が大いにあるのだから、と。<sup>37</sup>

5カ国との交渉により停戦確保の約束を取りつけて帰任した事務総長に対するレジェの5月26日付の返信は、この任務をアリアドネの糸に導かれたミノタウロス退治の神話に喩えて、怪物の首をとらないまでも、怪物に枷をはめたと、その成果を歓迎した。また、安保理への事務総長報告書が熟練と落ち着きを備えているのが好ましく、その文体および聡明な警告を交えた自在な結論には特に味わいがあると評価した。さらに、事務総長個人の役割がこれで目に見えて拡大されたのが、国連にとっては収穫になるとの見解を示している。これに続き、ハマーショルドから招待を受けると、その返信には、5カ国歴訪の成果を「創造的展開」だと述べて、職務遂行中の精神の自由と格調高い人間性<sup>38</sup> には感嘆したとも書き送った。<sup>39</sup>

それでも、この年夏には、エジプトに対する米国の援助撤回が引き金となって、スエズ危機が生起した。10月末の運河地帯の軍事行動をめぐっては、安保理の審議が暗礁に乗り上げたために、11月1日、緊急特別総会が事態の審議のために会合することになる。

10月31日の安保理会合の冒頭で、事務総長が次のように発言した。憲章の諸原則は、国連の機構よりも重く、その目的は個別の国家・人民のいかなる政策よりも尊い。事務総長は機構の奉仕者として、加盟国間の紛争につき立場を公にすることなく職務を遂行する責務があるが、その任務の性格から事務総長に要求される裁量と不偏性とが便宜主義に陥ってはならない。事務総長は憲章

35 UN doc. S/RES/113 (1956). See also Urquhart, *op. cit.*, pp. 140-153.

36 ヒマラヤ登山の記念にシェルパのテンジンから贈られたピッケルと帆船の模型がハマーショルドの客間を飾っていた。登山とヨットを愛するレジェはこれらに魅かれていた。ここでは、冒険的挑戦の伴侶を象徴するのだろう。

37 Lettre de D. Hammarskjold à A. Léger, 6 April 1956, dans Léger, Hammarskjold, *op. cit.*, pp. 99-100.

38 Lettre d'A. Léger à D. Hammarskjold, 26 Mai 1956, dans *ibid.*, pp. 101-102.

39 Lettre d'A. Léger à D. Hammarskjold, 6 Juin 1956, dans *ibid.*, pp. 103-104.

の諸原則の奉仕者であって、その目的に照らして何が正しく何が間違いかを決定せねばならない<sup>40</sup>、と。ハマーショルドは11月1日にこの事務総長声明をレジェに送った。それには、現下の大悲劇に関する個人的な立場からの見通しを、注意深い読み手には察してもらえよう、と書き添えられた<sup>41</sup>。抽象的表現ながらも、国連緊急軍の編成と派遣の基底をなす考えが、この声明から読み取られよう。

ハマーショルドは12月11日にリンデグレンの訳書をレジェに送るとともに、スエズ危機を振り返って、この数週間は全くの悪夢だった、と述懐している<sup>42</sup>。これに対して、レジェは12月22日に返信した。貴方はこれまで、そして今も政治的大嵐の渦中にあるが、自分が友人としてずっと気にかけていたのは、内的孤独という深奥のドラマの方だった。義務と制約を伴う職務に忠実である限り必然的な現実の要求の数々が、いかに両立させがたいことか！と。職務上の孤独に関するハマーショルドへの共感と心遣いは、レジェの書簡に繰り返し表れていた。

ハマーショルドがアドリアネの糸を手繰ったさらなる重大事件はコンゴ動乱である。1960年8月、情勢が混迷を加える中、現地に赴いて交渉によりカタンガの外国軍を撤退へと導いたハマーショルドは、ニューヨークに戻ると、8月23日付でレジェに書簡を送った。それは、これまで抑圧されて来た自立を要求するアフリカの動乱の渦中で、理性と節度に向けて格闘する私の身の上を案じておられたかと思う、と述べ、私が、貴方のように政治と外交の領域においても、もっぱら人間性の領域においても、経験に富む友（この度は後者の領域が一層重要なのだが）に思いを語る（think aloud、書簡は全体に仏文だが、この部分のみ英語）機会があればと幾度願ったか、申し上げるまでもない、と続く。そして、簡潔な報告だとして、文書がふたつ同封された。一方は、8月21日の安保理における事務総長の経過報告、他方は『年代記』の拙訳—この日付がまた一興なのだけれど—である。実にこの詩は、明晰な予見性をもって、目下展開する甚大な危機の行為者のひとりである私の対応の深奥を表現し

40 *Security Council Official Records, 751<sup>th</sup> Meeting: 31 October 1956*, UN doc. S/PV.751 (1956), paras. 1-5.

41 Lettre de D. Hammarskjold à A. Léger, 1 November 56, dans Léger, Hammarskjold, *op. cit.*, p. 113.

42 Lettre de D. Hammarskjold à A. Léger, le 11 décembre 1956, dans *ibid.*, pp. 114-115.

43 Lettre d'A. Léger à D. Hammarskjold, 22 décembre 56, dans *ibid.*, pp. 115-117.

44 1960年8月8日付。この日、安保理の審議は翌朝4時25分まで続き、事務総長の提案に沿って、ベルギー軍のカタンガからの即時撤退を要求し、ONUCのカタンガ進駐を必要と認める安保理決議146が採択された。ハマーショルドはその翌日、コンゴへと旅立った。See Urquhart, *op. cit.*, p. 423.

ていた、と綴られた。<sup>45</sup>

かかる事態の只中でレジェのノーベル文学賞受賞も決まったのであった。11月15日付書簡でレジェは、君は権限を行使するのに力強く、品格があると称嘆した。いま、君のうちたてた力の塔を見上げて、まさに「ドンキホーテ流」の探求だったのを感じる。これはまったく、国際舞台における日々の成果—しょっちゅう犠牲の身となりながらも—と同様に、並外れているよ、ノーベル賞受賞式典で、僕は、見えないけれどもそこにいるはずの君に向かって、秘かに語りかけることにしたい、と続け、書き上げたばかりの講演の原稿を同封した。<sup>46</sup>

ノーベル文学賞受賞講演の中には次の一節がある。「生と芸術とを、愛と認識とを切り離すことを自らに禁じながら、詩なるものとは行動であり、それは熱情であり、それは力、そして不断に限界を動かして行く刷新なのです<sup>47</sup>」。このように、詩なるものを、言語表現という形式に限定せずに、広く人間の創造的行動の表れと捉えるのであれば、ハマーショルドはまさに、詩なるものの実践に全身全霊を傾けていたということになる。さらには、レジェがブリアンとともに法による平和を探求し、伝統的な力の平和の限界を押し広げようとした外務省官僚時代に、詩を一切公表していなくとも、言語表現以外の形で彼なりの詩的实践は続けていたというべきなのであろう。この意味で、ふたりの外交上の営為は照応していた。

この前年秋のレジェの書簡には、次の一節が認められる。

「いつも鉄を熱しておくのだよ。君は、君の道で、創造者にして興起者 (créateur autant qu'animateur) <sup>48</sup> なのだから」。

レジェは、1942年にニューヨークで行われたブリアン没後10周年の催しで講演した。その中で、ブリアンの特質を描写するのに用いたのが、創造者および興起者ということばであった。国連を通じて平和を探求する年下の友人にもその同じ特質を見出し、印象的な表現により彼を鼓舞していたのである。

しかしながら、ハマーショルドを取り巻く状況は、ブリアンの時代よりも過酷だった。コンゴ情勢はその後も錯綜し、1961年4月にレジェは、ハマーショルドが過重労働の挙句体力の限界を越えてしまうのを危惧し、行政上の責任だ

45 Lettre de D. Hammarskjold à A. Léger, le 23 août 1960, dans Léger, Hammarskjold, *op. cit.*, pp. 181-182.

46 Lettre d'A. Léger à D. Hammarskjold, 15 novembre 60, dans *ibid.*, p. 188.

47 "Poésie, allocution au Banquet Nobel du 10 décembre 1960", dans Saint-John Perse, *op. cit.*, p. 445.

48 Lettre d'A. Léger à D. Hammarskjold, 24 octobre 59, dans Léger, Hammarskjold, *op. cit.*, p. 164.

49 "Briand (Discours prononcé à New York, pour une commémoration internationale d'Aristide Briand)", dans Saint-John Perse, *op. cit.*, pp. 605-614.

けでも軽減を考えるよう、休暇をとるよう助言する書簡を送っている<sup>50</sup>。

レジェの書簡は、ハマーショルドの職務に関連する限り、概して、状況に左右されない職務遂行の手法や姿勢の洗練を意識的に評価する一方で、職務の実体的内容に意見を述べることは極力控え、親身な理解者として内面的に寄り添う姿勢を貫いているように見受けられる。

一方は政府間国際機構の事務総長、他方は一国の官庁の事務総長と、職務上の地位と任務は異なっているとしても、兩人とも、力による平和を超越する多国間主義と法の支配を基盤とする持続的平和秩序の構築・維持を長期的課題として彼方に見据えながら、目の前の個別具体的な現実に対応するという職務上の責務は重々心得ていた。ゆえに、現実には、時間と環境との制約の下で、目の前の問題処理のための要求と、理念的目標への指向とをいかに適合させ、調和させられるのか、常に模索し、決断しなければならなかった。ハマーショルドは、自己の一般的な基本理念や世界認識については、関連する資料を積極的にレジェに送ったし、レジェもそれについては、明瞭な意見を述べている。そこで最後に、ふたりのやりとりと照合しながら、国際平和機構のあるべき姿とその機能の方向性に関するハマーショルドの思索を探ることにする。

### 3. 変化の時代に対応する国際平和機構の機能とは

#### ——ハマーショルドの探求と展望

まず、レジェが強く共鳴したハマーショルドの講話から始めよう。それは、1959年1月の原子力平和利用賞授与式における挨拶である。国連事務総長はこの時、科学技術の進歩がもたらす大いなる変化の時代における国連の役割をこう語った。冷戦、および歴史的西洋対アジア・アフリカ人民という二大対立に彩られながらも、地球上の人々が相互に接触の機会を広げる時代において、貧困・疾病・自由の欠如・不平等と戦う責任、そして、時代の変化を安定した平和へと導くことを通じて、人々が共に生きる道を拓く責任は社会全体にある。国連も、諸政府・人民の道具として、その重要な一端を担っている。国連は、諸集団・諸国民間の関係を築く装置として、科学技術の成果を人間の利益へと転換し、将来へ向けて個々人が自己の可能性を追求できる環境を創ることができよう。国連は、いずれ来たるべき世界秩序のほんの類縁にしか過ぎないけれど、そこへと向かう長い道のりのとば口を用意する。国連は、正義および自由に基づく進歩並びに平和を利益とする点では全人類が基本的に一体だという認識を基盤とする。この一体性とは、従属を迫る包括的・階層的なものでは

50 Lettre d'A. Léger à D. Hammarskjöld, 11 Avr 61, dans Léger, Hammarskjöld, *op. cit.*, pp. 197-200.



なく、発展的で相互啓発的なものである、と。<sup>51</sup>

レジェは4月2日付で書き送った。君は世界中で神出鬼没だが、なんとしても捕まえて、僕がこの講演をどんなに評価しているかを伝えたい。これは、拡大しながらも同時に一体性へと向かうこの時代を見事に総括しているし、力強く凝縮された表現の簡明さも好ましい。いずれ君の講演録が刊行される暁には、これを収録せねばならないよ。君の思索が時代のリズムを刻んでいる。僕もそこに加わりたいものだ、と。<sup>52</sup>

ハマーショルドはこれに励まされたとして、近く北欧で予定される講演の草稿2つをレジェに送った。そしてそこに、いささか即興の試みではあっても、貴方ならこれら新たな試みについて、言葉の背後にある本質を捉えて下さるだろうと書き添えている。<sup>53</sup>

当該講演は、それぞれ時代に対応する国連の機能を主題にしていたが、そのひとつは、同年5月2日のコペンハーゲン大学での講演である。ここでハマーショルドは、まず、国連には、交渉機関という側面と実務的機能を担う執行機関という側面があることを明確にする。執行機関が遂行するのは、軍事的機能、警察機能、外交的機能、行政機能等々である。次に、両機関の関係をこう説明する。すなわち、交渉の場としての国連においては、持続的接触を通じて議場の内外で独立の所信が形成され、次第に、国連の独立の立場の如きものが現れつつあって、それは、党派的利益とは独立の、国連憲章の目的に支配される所信の存在に根ざしている。それが存在するという事実が、国連自体の立場が展開する基盤となる。執行機関としての事務総長は、この独立した所信の一要素という資格によって、国連の代弁者として働く機会を有することになる。状況に応じ、諸政府が事務総長に代弁者としての独立の立場を認める範囲で、彼は独立の外交活動のための機会を広く得られる、というのである。<sup>54</sup>

ハマーショルドは胸中に、国連において、加盟国の主張の総和とは別の国際秩序なり国々の枠を越える倫理基準なりが芽生えつつあって、事務総長はその代弁者または執行者となり得る位置にあるという認識<sup>55</sup>をいつしか培っていた。その片鱗が、これ以前に安保理の場でも開陳されていた。

それは1958年4月29日の安保理会合の議事録に残されている。曰く、事務

51 *Text of Address by Secretary-General Dag Hammarskjöld at the Atom for Peace Award Ceremony, 29 January 1959*, UN doc. Press Release SG/779 (1959).

52 Lettre d'A. Léger à D. Hammarskjöld, 2 avril 59, dans Léger, Hammarskjöld, *op. cit.*, pp. 149-150.

53 Letter of D. Hammarskjöld à A. Léger, 25 April 1959, in *ibid.*, pp. 152-153.

54 *Do We Need the United Nations?*, May 2, 1959, UN doc. Press Release SG/812, available at <http://www.un.org/depts/dhl/dag/docs/needun.pdf>.

55 Cf. Urquhart, *op. cit.*, p. 259.



総長が安保理の審議にことばを挟むのは極めて異例ながら、かねて申し上げたように、国連の目的と憲章の原則とを支えるためになすべきとあらば、事務総長には発言する権利はもちろん、義務もある。事務総長は「人類を代弁する(“speak for man”)」権利はなくとも、安保理または総会に付託された問題につき、憲章の規定する人類の祈念の意味内容を表明する義務には服さねばならない。人々は、(核軍備競争という)目下の悪夢を免れるために指導力が発揮されるのを切望している。核軍縮へ率先して踏み出す政府は、世界の人々から称賛を受けるだろう。この人々の声を反映する国連憲章に基づいて行動する事務総長の義務として、こう申し上げる、と。<sup>56</sup>

この発言に対しては、東西両大国から相手陣営を利するものとの批判を浴び、その後の記者会見において、言葉が過ぎたのではないかとの疑問も出た。<sup>57</sup>

彼は発言の記録をレジエに送り、これは内心を吐露する「自分なりの詩的表現」であって、事務総長のあるべき役割を提示する部分は、「風」において貴方が詩人の役割を描写した詩句に呼応する、と明かしている。<sup>58</sup>レジエは返信に、送ってくれた記録文書により君の内面の苦難を間近に辿ることができるが、文面をいくら読んでも、均衡がとれて和解・調整を考慮した発言であって、どこが偏っているというのかわからない。忠実な水先案内人が航路に岩礁があると指摘するのを職務逸脱というような類か、と綴った。<sup>59</sup>

さらに、その後のケンブリッジ大学での国連事務総長講演において、相互不信や紛争の根底にある認識上の障壁が論じられたことをふまえて、レジエは、この講演は、国際共同体の前途に対する君の提言に新たな側面を加えていて、つまるところは人間精神の進化に基づく道義なのだという微妙な点は了解されただろうと書いた。そして、国連の目的が普遍性にある以上、それは政治家たちの目先の實用主義ではなく、未だ生成途上ながら、国家／国民を越えるある種の道義(une éthique sur-nationale)に拠って立つといわざるを得ないため、この物質主義的決定論の世紀にはまだ不安を呼ぶものの、この見通しには実に感興を覚える、と述懐している。さらに、思索と行動の間で君が精進した所産は何でも読ませて欲しいと付け加えた。<sup>60</sup>

道義的基準への内面的探求はどうあろうとも、国連事務総長が独立に活動す

56 Security Council Official Records, 815<sup>th</sup> Meeting: 29 April 1958, UN doc. S/PV. 815, paras 82-90.

57 See Urquhart, *op. cit.*, pp. 320-321

58 Lettre de D. Hammarskjöld à A. Léger, le 1 mai 1958, dans Léger, Hammarskjöld, *op. cit.*, pp. 132-134. なお、レジエの詩に呼応するというのは、“speak for man”の部分で、元の詩文は、“Mais c’est de l’homme qu’il s’agit ! Et de l’homme lui-même quand donc sera-t-il question ? ---Quelqu’un au monde élèvera-t-il la voix ?” “Vents”, dans Saint-John Perse, *op. cit.*, p. 224.

59 Lettre d’A. Léger à D. Hammarskjöld, 15 Mai 58, dans Léger, Hammarskjöld, *op. cit.*, pp. 134-135.

60 Lettre d’A. Léger à D. Hammarskjöld, 15 Juin 58, dans *ibid.*, pp. 136-139.

ることの客観的根拠としてハマーショルドが公的に常々強調したのは、国連憲章に明記された原則および目的である。そこに依拠する活動がいかなる可能性を孕んでいるか、1960年5月1日のシカゴ大学での講演において、彼は次のように語った。

まず、講演の冒頭で、国際法には立憲的国际法とでもいうべきものが、ごく萌芽的な段階ながら存在すると述べた上で、いまはまだ、共存のための国際組織体系から国際協力のための立憲的組織体系への過渡期にあつて、立憲的国际法は、理論的には漠たるものだと言及する。人間の社会的発展を辿ると、家族を組織し、村を、そして国を発達させ、国際交流の形として共存のための組織体系を築いてきている。それはさらに、協力のための立憲的組織体系へと進展し得るだろうとする。小さな単位が進化のために有効なら国々が利用されようし、大きな単位が発展と生存へと向かう可能性に優れる分野では国々の影響力を限定するルールを設定して国々を乗り越えるような、国際的な立憲的組織体系がありえよう。国連は今世紀に登場した共存のための国際制度の一例だが、国連憲章が共通の原則と目的を厳粛に定める点には、立憲的側面も明らかに備わっている。国連はその普遍性という点で、世界規模の国際協力のための立憲的枠組みへと向かう位置にはある、とみなしている。

国連憲章には、経験と必要に系統的に応じるため、改正なくして刷新をなすに十分な柔軟性が備わる。唯一の選挙された国際官吏で、原則的には全加盟国を代表する事務総長は、外交的政治的活動の幅を徐々に広げているが、それは、まさに必要の広がりに対応する。かかる活動はまだ実験的段階に過ぎず、日々困難に直面するとはいえ、長期的には想像力豊かで建設的な立憲的刷新が必要とされよう、という。移行期における行動は、全くの手探り状況ではあるが、確実なのは、目的は堅固に、状況には柔軟に接近してのみ、その探求の可能性を検証できることであつて、立憲的協力体系への創造的展開に至ることは確信している、と結んだ。<sup>61</sup>

レジェは、この講演に共鳴して、君のいう国際法の「創造的展開」は、ずっと僕をとらえてきたよ、君の包括的な構想は、高遠なのに決して足元を見失わず、将来の方向を見事に写しているね、<sup>62</sup>と書き送った。

翌年の国連総会に対する事務総長の年次報告書にも共通する考えが述べられた。それは、国連憲章の哲学についてのハマーショルドの理解を提示するとも

61 *The Development of a Constitutional Framework for International Cooperation, May 1, 1960*, UN press Release SG/910, available at <http://www.un.org/depts/dhl/dag/docs/chicagospeech.pdf>.

62 Lettre d'A. Léger à D. Hammarskjöld, 3 Juin 1960, dans Léger, Hammarskjöld, *op. cit.*, p. 177.

いえる。<sup>63</sup> 同報告書はまず、国連を平和共存のための定期的外交会議の場とみなす加盟国と、そこからより効果的な国際協力体へと移行しつつあるとみなす加盟国とが存在すると指摘する。次に、国連憲章には、動態的な政府間装置を創設し、それを国際的道義の5つの基本ルールの下に置くという起草者の意図が示されているとし、その基本的ルールとして、政治的権利の平等、経済的機会均等、法の支配、武力の違法化、平和的紛争解決・平和的変更を挙げる。そして、これらの憲章原則は、国連を単なる会議体とする立場とは相容れないし、会議体ではできない進化が既に国連の執行機能の展開に現れているという事務総長の認識が示される。<sup>64</sup>

ハマーショルドの行動を観察しても、その一貫した特徴として、指導的原則と現実の必要とは不可避に緊張関係にあることを意識し、両方に考慮を払って、目的の堅持と行動の柔軟性との両立を図っていたことが看取できる。<sup>65</sup>

以上に述べた思索を基礎に、彼は、現前する事態の転変や新奇性にも細心の注意を怠らずに、国連加盟諸国の意思や利害関係とは独立に、国連憲章の原則と現実の必要とに適うとみなす執行機能の実践に全力を傾けたのである。それは、国連の執行機関が安定化装置として機能することを通じて平和と安全に寄与するという、国連憲章上は明確ではなかった新たな地平を大きく切り拓くまでに到った。しかしながら、憲章の原則・目的を実施する執行的機能が、特定の状況においていずれかの加盟国の利益と両立しないことが明らかならば、頑強な抵抗・批判に遭遇せねばならないというのも厳然たる現実であった。<sup>66</sup> このことは、彼の描く国際協力のための立憲的組織体へ向けての創造的展開をめざすのに、国連憲章を根拠とするだけでは、実は十分ではないことを明白にする。それは、遠く険しい複雑な道程であった。この事実は重々認識しながらも、あくまでその目的を堅持するのであれば、無欲に一步一步慎重かつ着実に前進する以外にない。その際には、結果を求めず、いかに行動し、どの程度目的へと歩を進めたか、という変化の過程を確認しつつ次の歩を決めるのみであろう。

レジェには、外交官時代に同様の経験があった。ハマーショルドの執行的活動に関して、その成果よりも行動様式や手法を意識的に評価していたのは、彼の長く険しい目的への「遠征」を念頭に、その持続を脇から支えようと意図す

63 Lash, *op. cit.*, p. 545.

64 *Introduction to the Annual Report of the Secretary-General on the Work of the Organization 16 June 1960-15 June 1961*, UN doc. A/4800/Add.1, pp. 1-3.

65 Schachter, *op. cit.*, pp. 3-5.

66 特に、ONUC をめぐって、ソ連、フランスとの軋轢が増した。See Urquhart, *op. cit.*, p. 460 et s. and p. 532 et s.

るがゆえでもあったろう。行政職の長にして国際政治的行為者という国連事務総長の職務は極度の緊張にさらされ、ハマーショルドの心労は絶えなかった。並はずれた体力と行動力を備えた果敢な騎士であるとともに瞑想的な文人肌たるハマーショルドの内的苦悶にレジェは静かに寄り添い、共感を通じて彼の内的孤独を和らげることに心砕いた。それは、ブリアンが先鞭をつけた協議体としての国際平和機構が創造的に展開するのを彼方に見通す行為のようにも思われる。

## おわりに

ハマーショルドは、時代の転換に対応して国連憲章の目的を実現するためには、国連が加盟国の公開の討議フォーラム、政府間の問題解決の器となるだけでなく、具体的状況において平和的秩序につながる新たな問題解決を担う独立の主体となることが重要だと認識した。国連憲章には、それを可能とする立憲的基盤が備わっているから、組織の運営を通じて、その自立的機能を広げることが、人間の社会共同体の創造的進展への道筋だと見ている。これは、広域的な平和と安全の確保のために、公開の多国間協議の場として国際連盟を活用したブリアンやレジェの考慮と経験を越える思索の展開である。ゆえに、彼の思索の実体については、レジェとの意見交換から直接なんらかの示唆を得たというよりも、独自に構築されたものと考えべきであろう。

しかしながら、レジェとハマーショルドに共通するのは、国際機構なり多国間制度を固定的・静態的なものでなく、生命体の如く不断に変化・発展するものと捉え、状況に応じて適切に機能させるよう模索したことである。さらに、不断の変化・発展を導く指針として、国家利益の総和を越える何らかの道義的原則・基準を想定していたことも、ふたりに共通する。基本姿勢において共通する、経験豊富なよき理解者と語り合うことは、ハマーショルド自身が思索を透徹させ、彼自身の国際平和機構観や基本理念・展望とを明晰化、かつ深化させるのを大いに促進したことは疑い得ない。対話は、彼の思索を活性化させ、豊かにした。それがさらに、国連の執行機関として、それまでの組織の限界を動かししていく創造的活動を实践する源泉となったと考えられよう。

平和の使徒、ブリアンの法による平和の探求は、人間精神に対してその霊的可能性をつぶさに映す鏡を掲げる預言者たるサン＝ジョン・ペルスを介して、平和の殉教者、ハマーショルドへと繋がる、創造的展開を遂げたことを、レジェとハマーショルドの往復書簡は明らかにするのである。